

私は約 2 週間短期留学という形でペルーに行ってきました。今回の目的は栄養価が高く健康食として注目されているキヌアの栽培と現地での浸透性、児童労働の現状を知ることでした。

私が以下述べるのは、児童労働・地域社会と鉱業会社の関係性・教育事情・ペルー政府の農業に対する取り組み・治安対策について述べて行こうと思います。

### 児童労働について

まずペルーは貧困からの児童労働が問題となっていることは日本でも知られており、主に鉱業会社や大規模農園などが受け手になっているというのが従来の形でした。しかし現在では経済発展と政府による規制から、目立ったような児童労働は減少傾向にあるため今回は見られませんでした。カハマルカでお世話になったエドガーさんによると、「近年は政府の認定を受けていない業者などではまだ児童労働が存在している可能性がある」とのことでした。この可能性があるというのは、違法な鉱業会社は山岳地域に数多くあり場所を転々とするため実際の情報があまり得られず、その過程で安い労働力として子供が利用されているのではないかという事です。ここで分かったのは、現在では従来ほど大きな問題ではなくなっているということでした。

### 地域社会と鉱業会社の関係性

現在山岳部で問題になっているのが、鉱業会社と地域社会との関わりです。鉱業会社というのは山地つまり主に原住民が利用できる資源を削って鉱物を採掘する為、違法な会社は別として政府公認の会社は地域との良い関係を築かなければ採掘ができないことになってしまう。例えばエドガーさんの会社では、地域と会社との距離がとても離れているため連絡手段である携帯電話や電気を普及させる、地元の人々をより積極的に採用する為に小学校のような基礎教育機関を作るなどの取り組みをしていました。ただ、職を得た人々と賃金についてトラブルになることがよくあり、「元々職がなかった人に良かれと思ってお金を得る機会を与えたのになぜトラブルになるのか」ということ問題になっているといます。

ここでもうひとつ **Porcon** と鉱業会社という別の例を出してみたいと思います。**Porcon** というのは他の村落などとは異なり村でもありひとつの宗教共同体として存在し、人々は主に家畜・魚の養殖・農業で自給自足の生活を行いつつ暮らしている。宗教共同体が故に共同体の中にはリーダーがおり、その人物が絶対的な権力を持っているという組織構造となっています。ここのしきたりは慣習として厳しく、その一例として **Porcon** 以外の人物と結婚できない・成人する前に共同体外部の生活を知る機会を与えられますが、その際に外部で生活すると決めた場合にはこの共同体の一員としては戻ってくることはできません。もちろんここに外部から引っ越すというのも不可能で、アーミッシュ的な要素を持った共同体とも言えます。**Porcon** 内には小学校と同等の教育機関しかなく、もしそれ以上の教育を望む場合はカハマルカまで行かなければなりません（バスなどの通学手段は無いため、ほとんどの子が歩きで 5 時間ほどかけて登校する）。これが共同体から出る事とみなされることもあるため、ほとんどの人々は小学校程度の教育で止まってしまいます。よって上記の

事から 9 割以上の人々が個々の共同体に残り、また人が流失しないことからここでの経済は共同体の中でほとんど完結しているため外部からあまり利益を求めていないともいえます。元来 Porcon があるような高地には木が生えていませんでしたが、鉱業会社によって海外から持ち込んだパイン（マツ）の木を Porcon の人々が住居等に利用できるように植林しているのが確認できました。またここでは新しい地域発展の形として動物園・灌漑施設・魚の養殖施設・家畜も営んでおり外部の人たちにとっての観光施設としての価値を持たせ、パインを自家消費だけでなく植林業が出来るようになるという方法をとっていました。これらの設備費・電気設備費は鉱業会社からの支援によるものであり、先ほど述べたように Porcon の人々は利益をあまり追求しないことによってこそ成り立つ関係なのだろうと感じました。また観光地化とリーダーによる統率によって自分達の風習と伝統を保存したまま、自らの生活の質を向上できるのではないかと感じました。

ここで上記二つ鉱業会社と地域社会の関係に関する問題を挙げて見ました。一つ目の方では必ずしも鉱業会社がいい影響をもたらしているとは言えず、現状では水不足の問題も引き起こしていると言われていています。金などの鉱物を山地の土壌から精製するために水銀・シアン化ナトリウムが使われていることが多く、これらを利用する過程で多量の水を使用されています。精製で使用した水は出来る限り新たに精製で使用するなど施設内で循環させることによって節約するという試みは見られましたが、エドガーさんによるとやはり実際に鉱業会社が参入してから水不足になるということが多くと地域住民からの声もあるそうです。しかし住民らの雇用やかていの設備をはじめとして生活の質が向上したのは、鉱業会社の関与によるものというのは実際に見てわかりました。よってこの関係は良い悪いとの判断基準では解決できないものであり、仮に鉱業会社はその地に「もう採掘地としての価値がない」と判断した時、いま利用できているインフラ施設の維持管理は誰がするのか等の問題も出てくるのではないかと考えられました。

### 教育事情

ペルーの義務教育は小学校（6 年間）と *secundaria*（日本で言う中学と高校を合わせたもので期間は 5 年間）の 11 年間で義務教育であり、国立学校は授業料が無料であるので多くの子供が通えるようにはなっているが、教科書や文具は自己負担でこの額が小さいとはすべての家庭が言えるわけではない為に学校に通えない子供たちはまだ存在している状況です。教育機関の分布に関しては先ほど山岳地域での基礎教育について少し述べましたが、小学校は大体一つの地域ごと一つは見受けられ、*secundaria*・大学などの高等教育機関はある程度の都市部にあるというような偏りがありました。今回私が注目したのが、“*alto rendimiento*”という教育機関で、ここはより各分野への専門的な知識を早い段階から教育を受けられる場所として確立されており、入学するには小学校での成績によって入学の可否が決定されます。ここに入学するための塾や家庭教師はあまり一般的ではなく、学校の進度についていけない子や裕福な家庭は利用するものというのが一般的だといえます。またペルーは日本よりも教育に関することで寛容なところがいくつかあり、一例として私

立学校の設立や幅広い世代の学生を受け入れるという大学の配慮がありました。私立学校（大学除く）は簡単に作ることができますが、先生等の職員の管理がうまくできていない事もよくある為教育の水準や学校の経営が安定しないということが多いとのことでした。私立大学に関しては公立大学に比べると規模が資金に限りがある故に小さいというのが特徴であり、農業などの敷地を多く使う学問では公立大学の方が強みはあると感じられました。幅広い世代学生を受け入れられる方法として、学校内に幼稚園や保育園の様な託児できる場所がラ・モリーナ大学内にありました。このような施設は他の大学にも設けられており、実際に学生も子育て世代の人も日本に比べて多く見受けられました。

この寛容さを生かして日本の私立大学や一部の国公立大学の様にキャンパスを分けるなどの取り組みがなされれば、より多くの人々が高等教育を受けられるとともに大学を中心とした地域開発ということも可能になると感じました。また最近日本で行われている産学協同ということが進めば、提携する会社からの資金的な援助や現場で働く技術者との交流と大学側が与える地域開発という面での会社のイメージアップや研究所の利用、優秀な学生の確保につながるきっかけになるのではないかと思います。

ペルー政府の農業に対する取り組み（主にキヌアについて）

ペルーでは日本で言うコメ（主食のため）や韓国のパプリカの様な輸出目的の政府の積極的的事业がペルーでも行われていました。ペルー政府（農務省）が規模拡大として推し進めているのが、2013年に国連で制定された「国際キヌア年」をきっかけとして栽培を推し進めるようになりました。ペルーでの特徴はただの資金提供ではなく教育を伴っていることであり、方法としては政府関係の講師によって栽培法を学んだうえでの寄付(土地等の補助)がなされています。ここで教わる栽培法は有機農法であり、その理由としては小農が経済面も含めた持続的栽培できるようにという点と小農自体が食すのに安全ということでした。政府はここで栽培方法を学んだ人が地域にいて、実際に栽培すると同時に地域内の普及活動になるということを目的にしている為、栽培にかかるコストからルール作りまでのマネジメントに関与しています。ルールの一例としては、日本コメ農家等の様に高価な農機具は順番で使うといった、1小農にかかるリスク・コストの分散を設けていました。このキヌアの輸出における価値は栄養面での需要という点では広く知られていることではあり、有機農法で育てることによって先進国への輸出を考えた際には大きな付加価値が付きます。資材に関しても肥料別の作物の植物残渣・牛糞を利用し、日本ではあまり農法としては使わないミミズも土壌の団粒構造を作る為に利用していました。土壌の肥沃度保持や環境維持の対策としては、農地をいくつかに分けることによって休耕地を作りつつ時期にあった作物を栽培し、残渣を放置しそれを家畜が食すという物質の循環と土壌中の植物の病原体となる微生物を減らせるという目的で行っていました。ペルーの土壌は高山地域でも場所によって異なり、私たちが見学させていただいたカハバンバの農家さんの所では赤土で pH7 と中性土壌で栽培されていました。これは特に pH 調節はしていないとのことでした。このように政府の農業指導方法や普及活動はとてもよい方法だと感じました。

しかし政府内での意思統一があまりなされておらず、キヌアの例で言うと国内需要は本来高くない故に2013年の国際キヌア年の余波と外国の流行によって需要供給のバランスが乱れ、現在では2013年に比べて大幅に価格が下落しているという状態という事でした。さらにエドガーさんによれば、ペルーの農業者の経営(都市部と距離がある土地柄により、兼業農家でなく専業)は日本の農業では小農(兼業での小農)が多いという状況と似ていると感じました。※0部分は共通点としては除く。小農が多いということから、1小農だけでは市場に持ち込む輸送の手間とコストがかかるまたは市場への適切な出し方がわからず大きい業者に商売で負けて等の事を考慮すると、ほぼ全ての農家は穀物を扱う業者への販売委託をしてしまうことが多いといえます。この問題点は主に二つあり、JAの様に公的なものが国内の農作物が一括で行うのではなく多くの業者が存在することと仲介業者を通すことにより生産から得られる多くの利益を業者が搾取してしまうということです。一つ目は多くの業者がいることで収穫物の買い取り価格が業者ごとに異なり、農家はできるだけ高値で買い取ってくれるところを選ぶようになることから、仮に安定的に適正価格で買い取ってくれる良い業者が出てきても「一時的でいいから、高い価格で買い取ってほしい」と、買い取り価格安定しないような業者から買ってしまうということがよくあると知ることができました。二つ目は業者を経由しないと実質的に販売できないことで、農家さんはこの現状を知りつつも何もできないといえます。具体例としてキヌア農家の取り分は業者の取り分に対して約10分の1ほどであり、安く買いたたかれてしまうことが問題になっていました。日本のような一大組織ができず、農家の利益分が薄いことは上記に述べたことが原因の一つでもあります。私は農家の業者に対する信頼と選別できるような教養が必要なのではないかと思いました。

### 治安対策

ペルーにおける治安保持は市民警察(日本で言う自警団、消防団の様なボランティア)が大きな役割を担っており、地域内で起こる争い事や高山地域では鉱業会社の参入を防ぐ等の活動をしているといえます。またこの市民警察ができた理由として、「1980~90年代まで活発だったテロを未然に防げなかったことによる」とテロが起きた経緯とともにジャスミンさんから教えて頂きました。テロの団体が当時都市部に比べて劣っていた高山地域に住む人々から恐怖に落とし込むことで多くの人数を動員できたといえます。このことについては情報伝達の手段が薄かった為、遠くのリマまでうまく情報が届かず多くの人が犠牲になるテロになってしまいました。この事件を踏まえて地域ごとに市民警察が活躍するようになり、その流れが今でも続いており治安だけでなく地域のリーダーとして体裁を保つという意味でも重要というのを実際にお会いして理解できました。

### まとめ

今回の留学が初めての海外で事前準備から何をやっていいのかわからず、とても不安でしたが国際協力センターの山田さんやマイ・クエバスさんをはじめペルー滞在中にもラ・モリーナ大学の先生・学生、ホームステイでお世話になったエドガーさんとジャスミンさん、

カムカム協会の鈴木孝幸さんなど多くの方にサポートしていただき充実した短期留学となりました。語学に関しては、拙い英語でできるだけ質問して答えてもらったものを理解しようとは努めました。スペイン語と英語のほとんど山田さんに翻訳していただき、翻訳したものを聞くという形になってしまったのが少し悔いには残りました。これを期に基礎から語学に励んでいこうと思います。

少し話しはそれますが、日本ではNPOをはじめとする地域開発の団体は良いものであると信頼されており、「将来は地域の発展に貢献出来るような場所で働きたい」と私も含めて多いかと思います。しかし、エドガーさんによるとペルーには他の先進国からやペルー国内の団体など多くの団体がペルー国内での社会貢献という名の活動をしています。全ての団体が実際には大きな成果を上げているというわけではなく、いくつかの団体は自らの活動を維持するために貧困を調整し、それによってこのような団体の信頼度は現地ではあまり高くないという日本ではあまり聞けないような話も聞くことができました。今後このような機会を踏まえて日本である程度までの知識を蓄えていき、最終的な結論は現地で取り組むべきだということに基づき自分の研究に生かしていきたいと思います。



学生交流会



地域ごとにあるスクエア（この周りに教会と政府系の役所と地域における重役の人の家が



ある)



鈴木さんのカムカムとアグアへのペースト（ここからジュースなどに加工）  
カムカム農場ではカムカムだけでなくサチャインチ・キャッサバ・アグアへなどのその他  
多くの熱帯作物が栽培されていた。カムカムは水が豊富なところが本来の生息地であるた  
め雑草でマルチが施されていた。夜には昆虫の観察もさせていただいた。



Porcon の灌漑と養殖池と動物園。周囲に生えている木はパイン。本来 Porcon までの道ではほとんどパイン以外の木本は無かった。





上から

前述のキヌア農家の農場

2・3 枚目高山地域の地域リーダーの方とこの方が持つのは自作の灌漑装置

キヌアの研究所での IPM 実験の様子(中心のルーズリーフとペットボトルから右が無処理、左が IPM をはじめとするオーガニック農法) 若干ではあるが、左の方が葉の色・背丈・実の着きが良かった。

エドガーさんとジャスミンさんとその家族